

カンボジアを通して考える

相澤 栄子

横浜市立上飯田中学校

担当教科：英語

実践教科：英語

時間数：11 時間

対象学年：3年生・教職員

対象人数：3年生 102 名・ 教職員 25名

カリキュラム

<実践の目的>

カンボジア・ベトナム・中国をはじめ、外国につながる生徒が多く在籍する本校において、異なった肌の色・異なった言語や文化の存在はあまりに自然であり、彼らにとって自分がどこの国につながっているのかは大きな問題ではない。

しかし、この地域で育ってきた彼らが、中学校卒業と同時に外の世界に出て行くことになる。その時初めて他の生徒とのルーツの違いを認識することになるであろう。また、そのような中で、社会的な壁にぶつかることも予想される。彼らが自分達の国について理解を深め、誇りをもつこと、それが壁にぶつかった時に何らかの助けになるであろう。すぐに結果は出ないが、やがて彼らのアイデンティティの確立の手助けとなるように実践授業を進めていきたい。

また、何年にもわたり外国につながる生徒と一緒に生活してきた日本人の生徒たちに、外国につながる仲間のバックグラウンドをもっと知ってもらい、日本で暮らす外国人が生活しやすい社会を作っていく力になって欲しいと願っている。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	カンボジアってどんな国？ ねらい：カンボジアの基本情報の理解とプラスのイメージを感じ取ってもらう。	(1) Happy Christmas でウォーミングアップをする。 (2) ドライジャックフルーツの試食をする。 (3) カンボジアという国のイメージを発表する。 (4) ワークシートにカンボジアの基本情報をクイズ形式で記入していく。	(1) 音楽 CD (2) ドライジャックフルーツ (3) ワークシート
2	カンボジアの生活 ねらい：カンボジアの日常の風景から、一般の人々の生活をイメージする。	(1) フォト・ランゲージによる導入、グループごとに発表。 (2) 写真を見せながら紹介。 (3) カンボジアに帰国した仲間の様子を紹介する。	(1) フォト・ランゲージは現地で撮影した写真を使用。 (2) DVD (TVK 放送)
3	カンボジア事情 (1) 「カンボジアの生活・スラムに暮らす子どもたち」 ねらい：カンボジアの抱える問題について考える	(1) 「スラムで暮らす子供たち」を視聴する。 (2) プレインストーミング (3) グループごとに自分の意見を発表する。 (4) 感想を書く。	(1) ビデオ「スラムで暮らす子供たち」 (2) ワークシート

4	Chris Moon の取り組み ねらい:地雷という兵器とその恐ろしさを知る	(1) Lesson6 の聞き取り。 (2) 地雷除去活動中に、爆破事故にあったChris Moonの紹介。	(1) 英語CD (2) 教科書
5	カンボジア事情(2)「地雷」 ねらい:地雷の被害と除去活動の紹介	(1) 写真「足」を見せ、何をしているか想像させる。 (2) 地雷を発見し通報する子供たちを紹介する。 (3) 地雷の犠牲者の様子を紹介する。 (4) 地雷除去作業について紹介する。 (5) ビデオ視聴 (6) 感想を書く。	(1) 写真「足」 (2) 写真 JMAS の活動 (3) TVK の DVD (4) カンボジアフラッシュ ピース ミスチル タガタメ(ビデオ) (5) ワークシート
6	なぜ地雷が? ねらい:負の歴史の理解	(1) カンボジアの歴史紹介 (2) 内戦の記録 (3) 難民となった人々	(1) 人口ピラミッド(日本・カンボジア)の図 (2) ワークシート
7	Chris Moon の生き方 ねらい:限られた中で自分のできる事を精一杯やることの大切さについて考える。	(1) Chris Moon が義足でマラソンを始めたことを紹介。 (2) 地雷の被害に遭った子供たちへの支援。	(1) 英語CD (2) 教科書
8	カンボジア日本友好学園 ねらい:なぜ勉強するのか考える。	(1) カンボジア日本友好学園の紹介 (2) カンボジアの学生と自分との比較 (3) なぜ勉強するの?	(1) カンボジアで撮影した写真 (2) ワークシート (3) 現地で撮影したDVD
9 10	私たちにできること ねらい:今までの学習から自分達にできることを考える。(2月実施予定)	(1) 色々な支援について、そのプラスとマイナスを考える。 (2) 私のランキング (3) ディベート	(1) ワークシート (2) ランキングカード
11	未来に向けて (3月実施予定)	(1) ゲストスピーカーをお招きし、直接話を伺う。	

授業の詳細

1 時限目:カンボジアってどんな国?

味覚から入る多文化理解...ベトナムで購入したドライジャックフルーツを希望者に試食してもらい、どのような食感・味なのか感想を述べてもらう。日本にない果物の味覚を知る。

カンボジアという国についてイメージすること、知っていることをあげてもらう。

カンボジア国旗を見せ、色やデザインが意味するものを想像してみる。その後、人口・面積・

言語などの基本情報をクイズ形式で質問する。(ワークシート 使用)カンボジアの世界遺産アンコールワットの写真を見せ、かつてカンボジアを中心に大きな文明が築かれていた事に注目させる。

生徒の反応

- ・生徒たちは和気藹々と楽しく、クイズに答えながら、ワークシートに記入していた。
- ・授業後、カンボジアにつながる生徒の反応はどうだったのかと気になり、周囲にいた生徒に尋ねたところ、わからないところを仲間に教えるなど積極的に自国について話していたようで、母国に対する温かい思いがあることを知った。

生徒のカンボジアに対するイメージ

- ・貧しい国
- ・地雷がたくさんある国
- ・P くん (4月にカンボジアに帰国した元クラスメイト)
- ・暑い国
- ・ふしぎな果物がある?
- ・匂いがある
- ・一ノ瀬泰造

2時限目：カンボジアの生活

カンボジアで撮影したそれぞれ違う写真(農村の人々やプノンペンの様子、スラムの子供たちなど)を1枚ずつ各グループに配付し、どのような状況なのか、またどのような会話をしているのか想像してもらい、記入させた。グループごとに発表する。(フォト・ランゲージ)プロジェクターに大きくした写真を見せながら、どのような場面で撮影された写真であるか説明した。(首都の様子・農村部の様子)

関連するDVD(TVK放映)を見て、実際の様子を紹介した。4月にカンボジアに帰国した仲間と再会した時の様子も伝えた。

フォト・ランゲージによる導入風景



生徒の反応

- ・生徒はグループ学習に慣れていなかったため戸惑いもあったが、今後ワークショップ形式で授業を展開していくためには必要なので、まずはウォーミングアップ。多少ふざけたグループも見られたが、自由な雰囲気を大切に進めた。
- ・今年の4月にカンボジアに帰国した生徒の写真を見せ、彼の近況やメッセージを紹介すると、歓声が上がった。

プノンペンで再会したP くん



3時限目：カンボジア事情(1)

「カンボジアの生活・スラムに暮らす子どもたち」NPO「幼い難民を考える会」が制作したビデオ「スラムに暮らす子どもたち」を視聴した。現在のプノンペンの復興の様子、また農村から流入する人々の貧しい暮らしを描写したもの。視聴後、ブレインストーミングをする。(ワークシ

ト 使用)

グループごとに自分が感じたことを話し合う。

各自感想を書く。

カンボジアで活動する NGO について簡単に説明する。

生徒の感想

- ・十分に学習できなかつたり、力仕事が多くて生活自体は苦しそうなのに、暗い顔をしている人がいなくて、むしろ笑顔の人が多いなと思った。
- ・カンボジアの子供たちは貧しくても一生懸命に生きているのに、日本で生きる自分勝手な人たちにもう少し考えて欲しいと思った。無気力に生きている自分に腹が立った。
- ・辛い仕事や慢性の栄養不足など悲しい出来事が多い。でも決してかわいそうなどと思ちゃいけないと思う。彼らも必死で生きて頑張っているから、讃えるべきだと思う。辛いことが数多くあるってことは、嬉しいことも多くあると思う。

日本とは違い厳しい生活環境の中にあるカンボジアの人々、特に子ども達の笑顔に心を打たれていた様子である。厳しい現実の中、なぜ笑顔でいられるのか、カンボジアの人々が持つ明るさ、たくましく生きる力を知ったようである。

4時限目：Chris Moon の取組み (Lesson 6)

英語の聞き取り

「地雷を一つ造るのにたったの3ドル」

「地雷を一つ撤去するのに約1000ドル」

かつてカンボジア国内で地雷撤去活動の指導を行っていたイギリス人 Chris Moon を紹介する。彼はモザンビークで地雷撤去中に地雷に触れ、右手・右足を失う。その時の様子を紹介し、地雷の恐ろしさを知る。

生徒の反応

- ・英語の聞き取りで地雷の導入をしたが、地雷があまりに簡単に製造でき、撤去が非常に難しいことに驚いていた。
- ・また Chris Moon が地雷に触れた時の様子を彼の手記から紹介したが、非常に淡々と語られており、それがまた地雷の恐怖を感じさせた。

5時限目：カンボジア事情(2)「地雷」

子どもたちの「足」の写真(地雷を通報し、日本地雷処理を支援する会(JMAS)から地雷について話を聞いている子どもの裸足の足)、大人の「足」の写真(JMASのスタッフの朝礼の様子、作業用の靴を履いている)、それぞれの状況をグループごとに想像する。

フォト・ランゲージで使用した「足」の写真(現地で撮影)



各グループが想像したことを発表する。
プロジェクターに写した写真を見ながら、実際の状況を説明する。
地雷の被害と除去活動について現地で撮った写真とDVD（TVK放送）を交えて紹介する。
まとめと今後の課題としてメッセージビデオ（カンボジア フラッシュ ピース ミスチル タガタメ）を視聴する。



村の子供たちと JMAS

生徒の感想

- ・なんだか悲しいなぁと思いました。戦争が終わった今でも地雷があって、そのせいで被害を受ける人がかわいそうだ。手・脚は日常では欠かせないものなのに、それがなくなってしまうなんて。それでも笑って暮らしている人を見ると切なく温かい気持ちになりました。まだ地雷があって撤去するのは大変だけど、なんていうか...世界は寂しく惨いけど、小さな光がたくさんあるという気持ちにもなりました。
- ・地雷の数が不明というところに、難しい国だなぁと思いました。その事はみんなにあまり知られていないという所がすごく悲しいです。もっとみんなに地雷のことを知って欲しい。みんなが知ればカンボジアという国も変わると思います。そのためには協力が大事だと思います！心のどこかにカンボジアの地雷の事は思っていて欲しい。今自分が幸せだから良いのではなく、今の色々な国々の事も考えて欲しい。本当に、本当に。地雷がたくさん埋まっているのになぜ「笑顔」？それはみんなの気持ちが1つ...だから？
- ・人が生きている限り「格差」は絶対になくならない問題だと思う。地雷もなくならないでしょう。僕はベトナム・カンボジアへ行き、色々見たいと思う。「日本」という国に住むより、人のために生きることができるベトナム・カンボジアに住みたい。そして農業をしたい。

生徒からは多くの感想をもらった。それはミスチルの音楽という効果もあったが彼らのメッセージは私が現地で感じたものと同じで、生徒一人一人がそのメッセージを受け取っていた。「カンボジアで多くの笑顔に出会いました。それと同時に学んだ悲しい現実。悪魔の兵器『地雷』みなさん知っていますか？『地雷』の目的を...被害は戦争が終結した今も農業に従事する市民から幼い子どもにまで及んでおり、被害者は増え続けています...(中略)...幸せに暮らす人々がいる...その一方でゴミ山や路上で暮らす人々がいるのも事実です。あなたにとって『PEACE』ってなんですか？私たちの“当たり前”のことが“当たり前じゃない”人に出会い、目を覆いたくなる現実を見て、いっぱい感じて、いっぱい泣いて、いっぱい笑った...必死に生きる彼らの目には『生きる』という意味が精いっぱい込められている気がしました...(中略)...伝えたい事実はこれだけではありません。悲しい事実ですが世界には少年兵・児童労働・貧困・紛争・HIV・児童売春・人身売買などたくさん問題が今この瞬間も起こっています...(中略)...みなさんは知っていましたか？こんな風に「命」が「命」として扱われていないそんな人々がいることを。世界で起きている厳しい現実、それを知ることはそんなに難しいことではないはずです。まずは知ることから始めてみませんか？...」（「カンボジアフラッシュ ピース ミスチル タガタメ」より）

地雷によって障害者となった人々。人としての尊厳を保つために伝統クメール音楽を演奏しながら生計を立てている。



クメール伝統音楽
私たちのこの身体は戦争と地雷の結果です。生き延びるためにかつては家族全員で物乞いをしていました。今ほしかし子供たちを学校に通わせ、自分も人間らしく生きるために、こうして働いています。ご支援、お願いいたします！

発見された地雷



回収された不発弾と地雷（現地撮影）



のどかな農村の風景だが、未だに無数の不発弾や地雷が見つかる。しかも発見者の多くは子どもたちである。（現地撮影）



6時限目：なぜ地雷が？

カンボジアの人口分布図と日本の人口分布図を比較し、気がついたことを発表する。

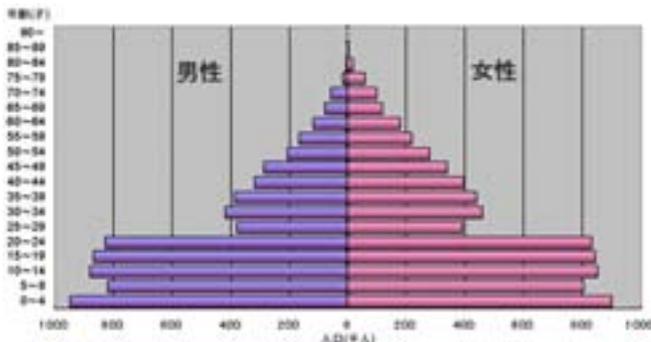
40代以上が極端に少ないことに着目し、その理由を考え発表する。

カンボジアの歴史を簡潔に説明する。周辺国やその他の国が内戦に大きく影響していることを知る。

ポル・ポト政権下で起きたことを考える。（「平和を求めて カンボジア難民少年、日本へ」のトラン・ソパナさんの体験を紹介する）

虐殺・強制労働・少年兵の問題について考える。

トゥールスレン収容所（虐殺博物館）を、写真を見せながら紹介する。



2005年 カンボジアの人口ピラミッド



寺に納められた頭蓋骨（キリングフィールド）

生徒の反応

- ・内戦の状況を説明すると、教室は重苦しい空気に包まれた。ポル・ポト政権の中で行われてきたことを紹介し、多くの知識層・エリート層が殺され、その影響が未だに国の復興を妨げているという現実には生徒は驚きを隠せない様子であった。
- ・一人のベトナム籍生徒が授業後私のところにやって来た。実は彼の母親もカンボジアで強制労働させられていたと話しかけてきたのである。私は大変に驚いた。なぜなら彼の両親は共にベトナム難民だと思っていたからである。母親はベトナムに逃げ延び、そこから日本へ難民として入国したという話である。「お母さんが生きて日本にやって来ることができ、本当によかったね。」と語ったところ、嬉しそうな笑顔を見せてくれた。彼の日本生活の中で、この学習が生かされるように祈った。

生徒の感想

- ・かつてのカンボジア政権（ポル・ポト政権）は今の日本と全く違って、惨く残酷でショックを受けた。子どもにも容赦なく強制労働をさせたり、拷問をする振る舞いは決して許せるものではないと思う。この政権が間違っていたことをしっかり伝えていくべきだと思う。
- ・僕はこの話を聞いて、とても惨く、聞いているのが辛かったです。このような事が2度と起きて欲しくないと思いました。
- ・やっぱり僕は恵まれていると思う。拷問や強制労働も想像できないし、命令した人もどうしてそんな惨いことができたのかと本気で思う。思想はそれぞれだけど、やはりポル・ポト政権は許せないと思う。その様な状況の中で、人を信じることができなかつたのも辛いと思う。

7時限目：Chris Moonの生き方（Lesson 6）

Chris Moon は右手・右足を失った翌年にロンドン・マラソンに参加する。それは自分と同じく地雷で傷ついた子ども達を助けるための基金を創設するためであった。

その次の年（1997年）にはサハラ砂漠で250Kmを6日間で完走するという偉業を成し遂げる。失ったものを悲しみ続ける生き方ではなく、限られた中で精一杯自分の可能性を広げていく生き方に学ぶ。変えることのできない現実と直面した時、それを受け入れ、自分のできることを懸命にやっていく生き方は、子ども達の人生の中で素晴らしいモデルとなると思われる。

所感

Chris Moonの生き方、それは自分のため自分自身の限界に挑戦するものであるが、同時に地雷被害者を助けるためでもある。内戦の悲劇を学習した後なので、人間が作り上げる悲慘な歴史と、同じ人間が崇高な意志をもってこのような取り組みをしているのは対照的である。人間は、人を殺し社会を崩壊させることもできるし、人を励まし勇気を与えることもできるということに着目し、そこから学んで欲しい。

トレーニング中のChris Moon（右）



8時限目：カンボジア日本友好学園

復興に向けカンボジアで今どのような取り組みがなされているのか、カンボジア日本友好学園の写真を見せながら紹介する。(創設者コン・ボーンさんはポルポトの時代に殺されたこと、日本に難民として来たこと、そして今カンボジアに戻り国の復興のため「教育」に重点を置き活動していることなど)

上飯田中学3年生の生徒達(各クラス1名)を写真とインタビューを交え、カンボジア日本友好学園で紹介してきたことを報告する。

ワークシートの質問に自分の答えを書く。

質問 A：名前・年齢 B：欲しいもの C：楽しい時は？ D：勉強は好き？

E：尊敬する人 F：将来の夢

カンボジア日本友好学園の2名(ソリヤー/チャン・ドーン)の学生にも同じ質問をしてきたので、写真だけを見せ、それぞれの答えを想像し、ワークシートに記入する。

カンボジアの学生の答えを紹介しながら、同年代のカンボジアの青年が感じていることや将来に対する夢について、自分達と比較してみる。



A：名前・年齢	ソリヤー(18歳)	チャン・ドーン(21歳)
B：欲しいもの	Base テストにパスすること	恋人
C：楽しい時は？	友達と一緒にいる時	恋人と一緒にいる時
D：勉強は好き？	とても好き(道徳)	とても好き(数学)
E：尊敬する人	父親	先生
F：将来の夢	医者になること	医者になること

若い世代がこれからの国作りに欠かせないことを説明する。また、復興のために「教育」は欠かせないということを理解してもらう。

日本では学校に行くことが当たり前であり、何のために勉強しているのかわからない生徒が大半である。私はカンボジアを訪問し、人が人として生きることができる社会を作るためには「教育」が必要不可欠であると痛感した。教員でありながら「教育」の重要性について十分理解していなかったことを正直に生徒に話し、カンボジアでの体験を生徒と分かち合った。受験という厳しい時期迎えている子ども達に、学習することの意味を知ってもらい、自分の将来ため、日本という社会のためであること、また世界が変わる力が一人一人の中にあることを伝えた。

日本の学校にあって、カンボジア日本友好学園の学校にないものをみんなで挙げてみた。

電気・PC・テレビ・インターネット・たくさんの本 ...

宿題として「日本の学校(生徒)になく、カンボジアの学校(生徒)にあるもの」を考えることになった。

生徒の反応

- ・カンボジア日本友好学園の学生が「勉強が好き」と答えていることに感心している様子であった。
- ・自宅を離れ学校の近くの下宿する生徒の家の写真を見て、自分達の環境と全く違うのにも驚いていた。
- ・自分達との環境の違いは大きいですが、同じような事に興味があり、同じような感性をもっていることを理解したようであった。



学生が下宿する家
(水道も電気もない)

9・10時限目：私たちにできること（2月に実施予定）

色々なNGOの活動を写真や映像で紹介する。また支援のあり方について考える。

ランキングの手法を使い、優先される支援のあり方を一人一人が考える。

もしあなたにお金があったら...という設定で

「募金をして必要な物を援助する」派 VS 「自分自身はその国に行きボランティアをする」派に別れディベートをする。ただし学級全体では難しいので、今までのグループワークを生かし活動する。

11時限目：未来に向けて（3月の卒業特別時間割の中で実施予定）

ゲストスピーカー（3～4名）を迎え、それぞれの立場からお話をさせていただく予定。スピーカーはまだ決定していないが、地域で難民支援活動をしている方、日本で生活する外国人（難民）の方、海外で支援活動に参加された方などを考えている。

卒業を迎え、この地域から飛び立つ生徒達一人一人が、それぞれのスピーカーからメッセージをいただき、生きていくための力となるようにと願っている。

<その他の取り組み>

(1) 小学校との交流

能見台南小の児童がカンボジアの生徒(M君)にインタビューをするために本校を訪ねてくれた。その後、児童達の公開授業に行き彼らを応援しようということになり、能見台南小に3名の中学生(カンボジアのM君、ベトナムのR君、日本人のG君)を連れて行った。最初はどうかと心配したが、児童と一緒にサイ(羽根つきの羽根より長い羽根がついている遊び道具。カンボジアの人は円になって手や足でサイを打って相手にパスして遊ぶ。)をやったり、校舎内を案内してもらったりするうちに、人気のお兄さんとなり、楽しく交流できた。児童にとっても、難民のマイナスのイメージではなく「親しみやすいお兄さん」「自分達日本人と変わらない」ということを理解してもらえたと思う。

3人の中学生にも大変貴重な経験となった。自尊感情が低い彼らであるが、今回の経験で自分達の存在が子ども達にとって「嬉しい」「頼もしい」ものであったことを体感し、自信になった部分がある。見送りに何人もの児童が駆けつけ、私たちの車を追いかける姿に感動していた。人のために何かをすると、自分も幸せになることが理解できた一時であった。

(2) 映画上映会

5時限目終了後、映画会「キリング・フィールド」を12月5日(土)に行った。10名の生徒が参加した。その中にカンボジア国籍の生徒、Rさんもいた。日本で生まれ、未だ一度もカンボジアを訪れた経験がなく、行きたいとも思っていないという話だったので、Rさんの参加は意外であった。彼女は映画会后、進んで私に話しかけてきた。小さい時にこの映画を見た記憶があるということで、本人も驚いていた。彼女の仲間も映画を見ながら、Rさんのカンボジア語が分

かる様子に感動し、Rさんに対する理解を深めていた。

(3) 職員研修会の開催

9月4日に『多文化共生について考える ～開発教育の手法から学ぶ～』を実施した。小野行雄先生(K-DEC)を講師に迎え、「ピンくに何がおこったか」というワークショップを行った。

所感

- ・この様なワークショップは職員研修としては初めてで、どうなるか不安な面もあった。なかなか変えることのできない外国人の現実を目の当たりにして、自分達の無力さを感じることも多いからである。
- ・あらためて外国につながる生徒たちの抱える問題を認識し、理解しながら接していくことの大切さをそれぞれの「気づき」を通して学んだ。



職員研修の様子。自分達のクラスの生徒たちとオーバーラップするところが多かった。

成果と課題

- ・実践授業の実施時期がインフルエンザや試験などで遅れてしまい、すべての授業の報告ができなかったが、英語の教科書の題材に関連した内容としてもってくると、この時期がベストであった。
- ・「英語の授業なのにどうしてこんなことをやるの?」という質問が出てくるかと思っていたが、夏休み前にReadingで「The Lotus Seed」をやった際、ベトナム難民について扱ったので、生徒たちはすんなり受け入れ、予想したよりも興味をもって取り組んでいる。
- ・1時限目に「カンボジアといえば…」と生徒がもつイメージを発表してもらったが、最初のクラスで「一ノ瀬泰造」「地雷を踏んだらサヨウナラ」と応える子がいて驚いた。小学校時代にかなり学習している生徒達がいる。事前に小学校と情報交換をし、どれくらいの内容をやってきたのか確認しておいた方が良かった。ただし小学校ごとにより違いがあり、全く取り上げていない小学校もある。やはり外国籍生徒が多い小学校は扱う回数も多く、内容も濃いことが確認できた。
- ・5時限、6時限とカンボジアの負の歴史を伝えてきたが、子どもたちは受け止めてくれたようである。また、カンボジアに対するマイナスイメージを懸念したが、その様な反応はなく、私たちの世界が抱えている大きな問題としてとらえてくれた。
- ・校内では掲示物がことごとく破られてきているが、フォト・ランゲージやカンボジア基本情報の掲示物は一切破られていない。生徒たちが自分の仲間の国として尊重している様子がうかがえる。
- ・映画会「キリング・フィールド」の後、保護者の方からも問い合わせがあり、ぜひ見たいので紹介して欲しいという依頼があった。保護者の方々にも興味をもっていただき、広がりを見せてい

ることが一つの成果である。

- ・英語教材の Chris Moon の生き方から、自分で変えることのできない現実を悲しみ、そこに留まるのではなく、現実を受け入れ自分の出来ることを精一杯やっていくことを学んだ。またカンボジアの子ども達の明るい笑顔から、そのことを感じ取ったようである。外国につながる生徒たちが、これから自分達のアイデンティティについて悩む時、この学習が何らかの助けになってくれたらと願ってやまない。
- ・カンボジア研修後、私にとってカンボジアは身近になり、子どもたちや保護者との関係も深まったように感じている。こちら側が理解をしようと踏み出すことが大切であることを学んだ。
- ・2月の放課後にカンボジア日本友好学園の生徒に手紙を書く活動を行い、交流ができるようにと考えている。

参考資料

- ・英語教科書 ONE WORLD 3 (Lesson 6 “A World without Landmines”)
- ・TVK のカンボジア特集DVD (8月17日放送)
- ・NPO 幼い難民を考える会制作ビデオ
- ・カンボジアフラッシュ ピース ミスチル タガタメ
- ・「I Want Peace! 平和を求めて カンボジア難民少年、日本へ」(永瀬一哉)

フォト・ランゲージで使用した写真の一部。



移動図書館の本を手にするスラムの女の子



農村の人々